

序

地域研究年報第43号は、2019年10月27日（日）から11月2日（土）、および2020年10月4日（日）から10日（土）にかけて実施した筑波大学大学院地誌学野外実験の成果を特集したものである。通常であれば2年目の調査は5月下旬に実施し、1年目の10月に実施する調査とは異なった季節で生じる地域事象も観察できたはずであった。ところが、2020年当初からの新型コロナウイルス感染症の流行によって、野外実験の実施について大幅な変更を余儀なくされた。この顛末に関しては鈴木ほか（2020）を参照願いたい（ウィズコロナの時代における地理学的フィールドワーク実習の実施とその注意点。地理空間13（2））。とはいえ、多方面から諸々のご配慮をたまわり、2020年10月に大人数での野外実験が実施できたことにまずは感謝したい。

この野外実験には30名（2019年）、51名（2020年）の大学院生が参加し、呉羽、堤、山下および坂本（2年目は西武文理大学）の4名の教員で指導に当たった。さらに、橋本操氏（岐阜大学）および中川紗智氏（筑波大学博士特別研究員）に現地での指導協力をお願いした。昼間は、大学院生がそれぞれの研究テーマに関してフィールドワークを行い、夕食後には少人数の対面ゼミで、さらにオンライン形式ゼミも導入してフィールドワークの結果報告に関して議論した。残念ながら懇親会はなかったが、ゼミでは視覚的な資料を用いた発表が導入されて討論が活発化した面もみられた。本号に収録された論文はこうした研究成果をまとめたものである。

今回の地誌学野外実験の調査地域は、長野県上小地域である。これまで、長野県内の松本、諏訪、長野、須坂、飯田、佐久、飯山、伊那といった都市とその周囲を含めた地域が調査対象とされてきており、未調査地域として上小地域が選ばれた。上小地域は、昭和および平成の合併前は、上田市とその周囲の町村を含んだ小県郡からなる範囲であり、千曲川がその中央部を東から西に流れる。北部は、標高2000mを越える浅間山の西部から烏帽子岳、さらに四阿山に至る火山群があり、そこから山麓斜面が千曲川に向かって展開し、一方南部では丘陵状の地形が広がる。中央部に上田盆地や塩田平が位置し、年間降水量900mm前後の少雨地域でもある。

上田市は上小地域の中心地であり、さらには佐久も含めた東信地域の中心地でもあり、県内でも上位の都市として位置づけられてきた。人口規模からみれば長野県3位に位置する都市である。それにもまして、上田市を有名にしているのは、かつてここに本拠をおいた真田氏の影響によるものであろう。2016年にNHK大河ドラマの舞台となると、真田氏の人気はますます高まった。大河ドラマの舞台が放映時のみに観光目的地として発展する形態は有名であるが、上田市内の関連目的地は2017年以降も賑わっている。真田氏支配後も江戸期には城下町として成長し、明治期になると養蚕業の発達がみられた。城下町は交通の要衝でもあり、北国街道に沿った柳町地区は江戸時代のまちなみ景観を整備している。東御市に位置する海野宿もまた北国街道沿いにあり、後継者不足などの問題点を抱えながらも往時の宿場町としての景観整備がみられる。城下町や養蚕業といった特徴のもとで、上田市中心部では明治期以降、金融や商業、工業なども合わせて発展し、また高等・中等教育の中心地としての性格も強めた。城下町に比較的隣接する地点に上田駅が立地し、その北側には松尾町や海野町、原町などの商店街を含む大規模な商業地区が形成された。しかし、駅前地区の区画整理や商店街の再編がみられる一方で、蚕糸業などの工業施設の跡地に大型商業施設の整備が進んでいる。

上田市中心部ではその中心性の高さや伝統に基づいて、独自の文化や地域意識が形成されてきた。先述の柳町は多くの観光者を惹きつけており、また上田市自体がロケ地としての性格を強め、多くの撮影を受け入れるとともに住民の地域意識も高まっている。その文脈で、食文化の独自性をアピールする動きもみられ、美味だれ焼き鳥のブランド化や市内での普及がその一例であろう。

千曲川の左岸には塩田平があり、列車も走り信州の鎌倉としても有名である。2019年の台風19号で上田電鉄別所線の千曲川橋梁が崩落した被害は記憶に新しく、交通機関と災害との関係を再考する機会となった。

塩田平では、かつてため池かんがいによる稲作が盛んに行われていたが、都市化の進行でため池の農業用水源としての価値は大きく減少している。ため池の管理のみならず機能も変化し、文化景観としての重要性が高まり、また多面的利用が模索されている。一方で、都市化の進展は災害リスクも高めており、その対応や防災意識が重要となっている。塩田平の最奥部には歴史の古い別所温泉が鎮座する。全国的な温泉地をめぐる逆風に対して、活性化プロジェクトで入湯客を維持しようとさまざまな試みがなされつつある。

上田盆地の周囲には山地が広がる。山地の手前の扇状地などの傾斜地には果樹栽培がみられる。かつての桑栽培からリンゴやブドウなどへと樹園地利用は変化したが、2000年頃以降は、恵まれた土地条件や行政による支援政策のもとでワイン向けブドウの栽培が盛んになっている。大手のワイナリーが存在する一方で、小規模にワインを生産するマイクロワイナリーの立地が目立っている。周囲の山間農村では高齢化が顕著であり、市街地南西部の室賀地区がその典型例であろう。ここでは、東信地域での工業集積による就業先の存在のもとで近隣地域に居住する家族があり、市街地やスーパーマーケットへの移動手段さえ確保されれば生活上の不便はあまりみられない。高齢化と並行して山間地では獣害の問題がますます深刻化し、その対策がさまざまなかたちで導入されている。先覚者のもとで農閑期の副業として拡大した農民美術の存在も、上小地域の特異な点であろう。

上小地域北部の山岳地域の一部は、観光目的地としての性格をもつ。とくに菅平高原や湯の丸高原は、夏季の合宿や登山、冬季のスキーの目的地として発展してきた。近年、冬季の観光が不振ではあるが、夏季の自然環境を生かして自然学校が複数整備され、それらが環境教育の拠点としての性格を強めている。

以上のような上小地域の特徴に影響を与えているものとして、上田市と東京もしくは首都圏との近接性がある。新幹線で約90分であり、高速道路を利用して3時間で訪れることが可能である。これは、観光客が上田市を訪問する際に便利であるのみならず、上田市民や東御市民が首都圏に出かけやすいことも意味する。前者については、真田のイメージとともに、城下町、温泉、ワイナリー、自然環境などの資源を有する上小地域の特徴とともに訪問者を惹きつけている。上小地域内部では、千曲川の存在による南北方向の移動の制約があるとはいえ、文化や産業からみた地域的なまとまりがみられ、結果として暮らしやすい地域としての性格が強まっていると考えられる。

本報告書は、さまざまな側面からみた上田市をはじめとする上小地域の地域性を明らかにしようとしたものである。2年間の調査という時間的制約や人数の制約もあって、成果としては不十分な面もみられるが、本冊子の内容が、上小地域やその隣接地域の人々にとって何らかの役に立つことができれば、地域研究の一端をになうものとして望外の幸せである。なお、成果の一部は、上田市のまちなかキャンパスうえだ市民講座「上田市ってどんな地域？」にて報告したが、その動画は、筑波大学山岳科学センターのYouTubeチャンネルにて公開されている。（YouTube：<https://www.youtube.com/>から「山岳科学センター」で検索。）

現地調査に際しては、上田市政策企画部の方々に滞在中の調査全般のみならず調査後の成果発表会についても調整をはかっていただいた。個別には、上田市や東御市の関係部署、上田市立図書館、信州上田観光協会、別所温泉観光協会、上田商工会議所、諸地域の公民館など数多くの関係機関の方々からも資料の提供や閲覧の便宜をはかっていただき、また貴重なご意見やご協力をいただいた。さらに、聞き取り調査やアンケート調査のために訪れた事業所や農家、工場、商店、さらには市民の方々から親切な対応を得た。とりわけ2020年10月の現地調査では、コロナ禍にもかかわらず、調査に快く対応していただいた。加えて、調査滞在中の宿泊拠点としたホテル上田西洋旅籠館、報告会を企画運営していただいた筑波大学山岳科学センターの山中史江氏および「まちなかキャンパスうえだ」の方々にも、さまざまな便宜を図っていただいた。以上、記して厚くお礼申し上げる次第である。

2021年1月
呉羽 正昭